

(十二) 明治二十四年敷設の木製水道管

町文化財 平成二十六年十月指定

明治二十二年（一八八九年）の町村制が定まり、今の東伊豆町は城東村と稲取村の二つの村になりました。当時の稲取村で初めて村長に選ばれたのが、田村又吉です。又吉は、道路や港を整備し、小学校校舎の建設準備などに取り掛かります。このような又吉の村長としての業績の一つが、村に水道を敷いたことです。

当時の稲取村は飲み水がよくなかったため、コレラなどの伝染病に苦しんでいました。又吉は伝染病がひろがることを防ぐために水道を敷くことを決意します。また、これには又吉が稲取村に迎えた帝国大学（今の東京大学）出身の医者である西山五郎からの助言がありました。

稲取村は、村の北東部を流れる沼津川の上流を水源として八〇〇間（約一四五四メートル）

ル）の水道を敷き、七個の水槽を置いて飲み水としました。「近代水道百年の歩み」（日本水道新聞社出版）によると、明治時代に初めて水道を敷設したのは明治二十年（一八八七年）にできた横浜であり、稲取はこのわずか四年後にできています。

稲取村は、早くから水道を敷設したことなどから、明治三十八年（一九〇五年）に日本の「模範村」として代表的な三つの村のひとつに選ばれています。また、又吉はこの業績などから藍綬褒章という勲章を受けています。

